特別展示 2012

東工大で益子焼

～知る・ふれる・つかう～

特別展示「東工大で益子焼」の開催にあたって

このたび益子陶芸美術館ならびに濱田庄司記念益子参考館の共催を得て，昨年発足した東京工業大学博物館にとって初めての主催行事として「東工大で益子焼〜知る・ふれる・つかう〜」を大岡山キャンパスで開催することが出来ましたことは私の喜びとするところでございます。後援していただきましたマスコミ各社，自治体，各種団体，ならびに開催にご尽力いただいた関係各位に心からお礼申し上げます。

東京工業大学は我が国最大の国立理工系総合大学として昨年創立 130 年を迎えました。これまで常に世界先端の理工学における研究成果を基にしてものづくりを軸とした産業界への貢献を果たしてきました。その中でも本学が益子焼と深い関係を有することは誠に貴重であり，東工大の奥深さを感じさせるものです。河井寛次郎，濱田庄司，島岡達三の 3 名の大先輩が本学で学んだ窯業学をものづくり技術として益子で開花させ，このたび大岡山に益子焼の真髄を運んできてくださいました。本学教職員と学生はもとより，広く学外の皆さまにもこの機会に益子焼を手にとってその素晴らしさを肌で感じていただければ幸いでございます。

東京工業大学長　　三島　良直

なぜ「東工大で益子焼」か？

本年 10 月, 東工大博物館は, 一風変わった展示会を開きます。題して「東工大で益子焼　〜知る・ふれる・つかう〜」です。

その内容は，益子の陶芸家 15 名にお願いして，各自の窯で作品を制作して頂き，それを本学博物館で展示し，来館者にお買い頂き，使っていただこうというものです。益子陶芸美術館と濱田庄司記念益子参考館に共催の協力をあおぎ，また販売は益子の販売店協同組合にお願いしております。

なぜこのような展示会を行うのか？その理由の一つは本学と益子の深い関係にあります。本学の前身校を卒業した濱田庄司が本格的作陶に入った地がのどかな益子でした。材料など主に益子のものを使い, 健康で用の美をもつ力強い民藝陶器を大量に制作して人間国宝となります。濱田は自分を,「益子で育った」と書いています。同じく東工大を卒業して濱田の弟子となり，独自の「縄文象嵌技法」による大量の見事な作陶をして，人間国宝となった島岡達三が，その仕事をなしとげたのも益子においてでした。

また，現在益子で活躍している本学卒業生に村田浩がいます。そして，今日，益子には実に数百名の陶芸家が活躍しています。これらすべての人々が，益子あっての陶芸家と云えましょう。

その益子が，2011 年 3 月 11 日，突然の東日本大震災によって甚大な被害を受けました。町も陶芸家も，現在復興に全力をあげて努力しておいでです。今，益子について私たちができることは何かを考えた末に，今回の一風変わった展示会を実施することが決まった次第です。

「東工大で益子焼　〜知る・ふれる・つかう〜」展実行委員長　道家　達將

益子焼の里，栃木県の益子町。東京近郊にありながら，身近に触れる機会は意外に少ない。その益子が東工大にやってきます。

人知を超えた地震のエネルギーは，震源から遠く離れた益子町にも甚大な被害を及ぼしました。益子に定住し民藝運動の中心を担った人間国宝・濱田庄司が興した益子参考館は，大谷石造の展示室と名品の数々が破損し，登り窯も崩壊しました。また，人間国宝・島岡達三が愛用した窯や，活躍中の多くの作家達の仕事場・作品が被害を受けました。1000 を超える人々が関わる益子の一大産業，陶器制作・販売は，物理的・経済的に大打撃を受けました。

窯の再築，ボランティア活動，復興基金の設立，作家達による東北地方への食器セットの支援活動。これら地域を超えた活動が町一体となって進められています。現在の益子は着実に復興の道を歩みつつあります。しかし，益子の産業が生み出す文化や社会の貢献こそが最も困難であり，それがもとめられています。

この度の特別展示は，益子に築窯し益子を育てた濱田や，益子で大きく育った島岡らが，かつてそのキャリアの第一歩として窯業を学んだ東京工業大学に，益子をもってくるものです。現在益子で活躍する気鋭の作家 15 人を招き，彼らの制作した陶器を鑑賞し直接手に取り購買いただけることで，益子と益子焼ををより多くの方々に体感していただきたいと思います。期間中には，講演会やシンポジウム，会場で陶器制作を体験できるイベントも行います。この展示会が，これらの益子への応援となり，産業・文化復興の一助となればと願っております。

出品作家の紹介

ろくろ・手びねり・型成形，益子の伝統釉や独自の釉薬，松薪の登窯やガス窯など。焼物づくりの素材・手法は千差万別ですが，出品されている陶器は，いずれも益子の地で生まれました。

本展示には，現在の益子を象徴する作家 15 名に出品いただいております。今日も益子で作陶し多様多彩な作品づくりに日々励まれている方々です。

展示によせて，作陶の際に心がけていることや，追い求めている表現・技法などについてのコメントをいただきました。出品作品には，刺激的かつ個性豊かな人柄と共にものづくりにかける思いが，見事に表現されています。

濱田 晋作　Shinsaku HAMADA

私は父庄司の助手を務めた後，作家としては 40 歳から始まった。遅いスタートであり作陶以外は特に芸のないままここまでやってきたわけだが，無事これ名馬とでも言うのか, いつの間にか 83 歳まで齢を重ね, 父の年齢を超えてしまった。お陰様で日々慣れ親しんだロクロの前に座れることは有り難い限りである。

この度は，父の母校である東京工業大学での益子の展覧会が開催されることになり，両者の結びつきが再び深まっていくことに期待している。また，展覧会の売り上げの一部を震災で被災している濱田庄司記念益子参考館にご寄附頂くということであり，重ね重ねのご配慮に感謝申し上げ挨拶に代えたい。

1929　濱田庄司の次男として東京に生まれ，翌年家族で益子に移住
1950　早稲田大学文学部美術工芸科卒業　卒業後，濱田窯で庄司の下で修行を積む
1970　庄司の助手として世界各地を巡遊後，日本橋三越本店にて個展を開催（以後毎年）
1978　国画会会員となる
　　財団法人益子参考館館長に就任
1985　ロンドン　リバティーハウスにて島岡達三氏，船木研兒氏との三人展開催
1986　ニューヨーク　ブルックリン美術館扁壺買い上げ
1987　「サロン・ド・パリ展」にて大賞受賞
1990　外務省・国際交流基金の要請でインドネシアの日本週間に陶芸のデモンストレーションを行う
1999　第 27 回下野県民賞受賞　益子陶芸美術館にて記念展を開催
2008　栃木県文化功労者受賞　翌年，益子陶芸美術館にて記念展を開催

濱田 友緒　Tomoo HAMADA

1967　濱田晋作の次男，濱田庄司の孫として
　　益子町に生まれる
1991　多摩美術大学大学院美術研究科修了
1995　益子町の使節団として渡英。セントアイヴス，
　　ロンドンなど訪問
2000　ディッチリング美術館「Pottery East&West展」
　　出品，デモンストレーションも行う
2001　日本橋三越本店にて個展開催（以後隔年）
2002　ロサンジェルス日米文化会館
　　「現代日本陶芸作家展」出品
2005　アサヒビール大山崎山荘美術館
　　「濱田窯三代　庄司・晋作・友緒展」に出品
2009　リーチポタリー（セントアイヴス）にて個展開催
　　ボストン　パッカーギャラリー「濱田窯三代展」
　　ハーバード大学などでデモンストレーションと
　　講演会を開催
2011　震災で崩壊した登り窯と塩釉窯を再建
　　日本橋三越にて「濱田窯開窯８０年記念個展」
　　を開催
2012　（公財）濱田庄司記念益子参考館の館長に就任

　濱田窯は去年開窯 80 年を迎えた。益子焼が始まって約 160 年なので，ちょうど半分ほどの関わりである。この節目の年に益子焼始まって以来の被災で，一時は気力体力ともに整わない状態であったが，多くの温かい支援や励ましにより，活力を頂いて復興へ向かわせて頂いている。濱田窯も先頃全ての窯が再建し仕事場が整った。いよいよ本腰を入れて作陶が出来る喜びを今かみしめている。

　益子焼にはもともと自由で明るく前向きな気風が漂っているが，震災直後からそれぞれが力を合わせ，積極的な活動でこれからの益子を造り上げようと努力しているところだ。

　この度，祖父ゆかりの東京工業大学で，活力ある益子焼の紹介が出来ることを大変光栄に感じている。また，収益の一部を同じく被災している濱田庄司記念益子参考館の再建基金にご寄附頂けるとのことで，ご協力いただいた東工大とご参加頂いた作家の皆様，また，お越し頂いた皆様に感謝申し上げる次第である。

橋本 秀一　Shuichi HASHIMOTO

1954　益子町に生まれる
1980　濱田篤哉氏に師事
1984　益子町大沢にて築窯独立
1991　「日本民芸館展」入選
2000　「益子陶芸展」入選
　　栃木県立美術館　栃木県美術の 20 世紀 II 「千年の扉展」に出品
2003　「益子現代作家陶芸展」出品
2004　益子の現代「陶芸益子 100 人展」出品
2007　「濱田庄司とその系譜展」出品

　はやいもので，今年，独立 27 年になります。

　自分の独立時の考えは，益子らしい物を作ることでしたので，
　それについては，迷いもぶれもありませんでした。

　てらうこともなく，用としての陶器を作りつづけています。

島岡 龍太　Ryuta SHIMAOKA

　我家は親父で四代目の職人の親方の家系です。私は父と同じ焼き物作りをし，象嵌技法で器を焼いてきました。基本的には父から，色んなモノを受け継ぎ，親父には感謝しています。

　京都工繊大の無機材料学科（昔の窯業科）に学んだコトは，焼きもの（ceramic）は科学（science）だという考え方が出来ます。「民芸の精神」を活かしつつ，象嵌の文様で，これからもあそんで生きたいと思います。

1952　益子町に島岡達三の長男として生まれる
1976　京都工芸繊維大学卒業
1981　合田陶器研究所にて勉強
1987　青山グリーン・ギャラリーにて個展（以後隔年）
1989　大阪阪急百貨店にて個展
1990　銀座松屋にて個展
2004　益子つかもと「二人展」
2007　益子つかもと「親子展」
2011　青山べにや「二人展」
　　「益子・北関東の陶業被災を超えて」
　　気鋭作家１２人による作陶展

松崎 健　Ken MATSUZAKI

　陶芸は土もみ三年，轆轤十年と言って技術を大事にされています。私も蹴轆轤で三十年やってきましたが，その轆轤から少し離れて心の中のものを，一つ一つ手捏ねで創ることにしました。創りたい思いが先で，それに必要な技術は後から付いてくると云う考え方に変わりました。もちろん今までの経験があってのことですが・・・・・。

　一つの仕事を完成させるためには，十年以上は掛かります。私が仕事を変えてから，窯変が表現の一つとなり，十五年かけて窯変が私の意匠となって来ました。

　今日までに四十年の積み重ねがあって，さらに十年，二十年かけて，素材の美しさを炎で新たな表現で個性の強い土と真っ向からぶつかり合い，焼いて，焼き貫いて土自らの表現に私の想いを乗せて行きたいと考えています。

　科学が進んで，どんな焼物でも焼ける時代になったとしても，素材の美しさを表現するのに科学だけで表すことは出来ません。そこに創り手の心が無かったら，人に感動を与えることは出来ません。

　私は物を創ることは，心を表現することだと信じています。

1950　日本画家・松﨑脩己の三男として東京に生まれる
1972　玉川大学芸術学科陶芸専攻卒業後，島岡達三の門に入る
1977　益子町に築窯，現在に至る
1978　京王百貨店新宿店にて個展（以後毎年）

1995　ニューヨーク　BABCOCK GALLERIES
　　「Six Master Potters at the Modern Ages 展（濱田庄司，島岡達三，松崎健，バーナード・リーチ，ウォーレン・マッケンジー，ランディ・ジョンソン）」
2002　ボストン PUCKER GALLERY BOSTON にて個展（以後隔年）
2003　ニューヨーク　メトロポリタンミュージアム
　　「織部－転換期の日本美術展」出品
2005　イギリス「インターナショナル･セラミックフェスティバル」にてワークショップ
2006　ボストン　ハーバード大学にてワークショップ
2012　宇都宮　青木ギャラリー「松崎健　大皿展」

島岡 桂　Kei SHIMAOKA

愛着の持てる日常品（特に食器）をイメージしながら，作陶して居ります。
父から受け継いだ“ 縄文象嵌 ”技法を中心とし，ロウ抜き，刷毛目，彫絵などの技法を用いて製作しております。
この度は色々なご縁で，ここ，東京工業大学百年記念館での展覧会に参加できる事を大変嬉しく思います。
まだまだ益子も震災（一部，その後の竜巻）のダメージが所々に残されておりますが，復興に向けて少しずつでも前進して行けるように努力して参ります。

1978　益子町に筆谷等（日本画）・筆谷淑子（ガラス工芸）の次男として生まれる
1996　宇都宮短期大学附属高等学校・調理科卒業
1997　栃木県立窯業指導所（伝習科）卒業
　　祖父である島岡達三の門下として６年間修業
2003　島岡製陶所にて製作活動に入る
　　東京銀座たくみにて卒業展開催
2004　松屋銀座にて個展開催（以後毎年）
2005　阪急うめだ本店にて個展開催（以後毎年）
　　西武百貨店池袋店にて個展開催（以後毎年）
　　島岡達三の養子となる
2007　JARFO「NY 酒生展」出品
　　島岡製陶所を継承する
2011　広島そごう「日本の美展」出品

村田 浩　Hiroshi MURATA

「触れて使う」は焼き物の使命でしょうか。
私は益子の昔ながらの釉薬を使い作陶を続けています。肌ざわり，使い心地のよい益子で糠白釉と呼ばれる乳白色の釉薬を好んで使っています。益子を代表する釉薬の一つです。
この釉薬は稲作文化と深い結びつきを持ち，多くの産地でそれぞれの呼び名で使われています。稲のワラやモミがらの灰が主原料となる釉薬で厚み，焼き方，技法により色々の表情を見せてくれます。登り窯で焼くのに向いた釉薬ですが，現在高性能灯油窯で登り窯の一室を再現し，糠白釉の新境地を探究しています。

1943　東京に生まれる
1944　栃木県益子町に移住
1967　東京工業大学無機材料工学科を卒業
　　その後，東芝でガラスの仕事に従事
1970　陶芸の道に入る
1977　登り窯を築窯し独立
1978　以来，毎年個展開催
2000　栃木県立美術館　栃木県美術の 20 世紀 II 「千年の扉展」出品

東工大非常勤講師として粘土の成型技術の講師をつとめる

加守田 太郎　Taro KAMODA

今益子は，個人作家がほとんどです。そんないろんな作風の人たちが一同にあつまって会が開けるのはたのしみであります。

私は，ほとんど手びねりで作っています。時間はかかるのですが，手の中で作品がふくらんでくるのを楽しんでいます。

1963　益子町に生まれる
1983　作陶を始める
1986　青山グリーンギャラリーにて初個展
1987　藤野屋（佐野）にて個展開催
1995　民芸店ましこ（益子），天満屋（岡山）にて個展開催
2001　もえぎ（益子）にて個展開催
2003　京王百貨店　京王ギャラリー（新宿）にて個展開催
2004　つかもと作家館（益子）にて個展開催
2010　アートサロン光玄（名古屋）にて個展開催
その他，現代陶芸貫土里ほか各地で個展開催

佐久間 藤也　Fujiya SAKUMA

明治時代創業の 100 年以上続く窯元の４代目当主として作陶を続けて 25 年。益子の土と釉薬だけ使い，益子焼の伝統を守り続けております。

先の東日本大震災において私共では，３基の窯が崩れ，最近になってやっと復興の目処が立ちました。窯は，物作りにとって大切な道具であり，伝統釉を発色させる上でも必要です。釉薬により窯を使い分け最高の発色が出るよう努力しております。私は，益子焼の伝統技法や風土を受け継ぎ，益子の柿釉・黒釉・糠釉を駆使し，新しい感覚で作陶することを心掛けております。また，塩釉も取り入れながら，見る人を楽しませる事と使い勝手の良い物を作り出す事を目標に作陶していきたいと思います。

1963　祖父 佐久間藤太郎，父 賢司の長男として
益子町に生まれる
1985　名古屋芸術大学美術学部卒業
1986　栃木県立窯業指導所修業　佐久間藤太郎窯に入る
1996　日光東照宮よりロンドン塔　王立甲冑博物館
リーズ新館「福徳庵」寄進用抹茶盌製作
1999　「第 73 回国展」初出品初入選（以後連続入選）
2003　「第 77 回国展」新人賞受賞
2004　国画会　会友に成る
2005　「第 79 回国展」国画賞受賞　国画会　準会員に推挙
2006　伝統的工芸品産業振興の功績により経済産業大臣より
表彰を受ける
2007　益子陶芸美術館作品収蔵

萩原 芳典　Yoshinori HAGIWARA

　従来の益子の材料で伝統的な技法を新しく開発した技法を使って自分なりの表現が出来ればと日頃から考えながら作品を製作しています。

　益子の釉薬の色合の変化を見ていただきたいです。

1974　萩原製陶所５代目として生まれる
1994　栃木県窯業指導所伝習生，研究生修了
　　萩原製陶所に入り作陶を始める
2004　「第 78 回国展」出品入選（以後連続入選）
2007　国展奨励賞受賞
　　「第 62 回栃木県芸術祭美術展」入選（以後連続入選）
2008　国画会会友となる
　　栃木県芸術美術展奨励賞受賞
2009　国展国画賞受賞
2010　国画会準会員となる
　　「第 25 回栃木美術展」入選（以後連続入選）
2011　PUCKER GALLERY BOSTON にて個展
　　栃木美術展奨励賞受賞

吉川 水城　Mizuki YOSHIKAWA

1941　東京都豊島区に生まれる
1943　神奈川県小田原市で育つ
1964　東京芸術大学工芸科卒業
1966　東京芸術大学大学院陶芸専攻科修了
1966　栃木県窯業指導所に技師として入所
　　「第６回伝統工芸新作展」にて奨励賞受賞
1969　益子町北郷谷に窯を築き独立
1976　日本工芸会正会員となる
1984　伝統工芸新展鑑査委員（1989，2004 年）

　益子で採れる「あしぬま石」を使って黒釉を作り，それをメインに製作しています。

　「益子の黒釉」とは少々ちがう形で絵つけなどをしているのが自分の持ち味ではないかと思っています。

ハービー・ヤング　Harvey YOUNG

この 100 年もの間に，益子は焼き物のメッカとして益々世界的に知れ渡りました。それは陶芸を生涯の仕事として，この小さな町で陶芸生活をすると決め，多大な努力をされた多くの優れた先人達のおかげです。彼らの陶芸界への貢献と功績の偉大さを私も見習いたいと切望しています。

永きにわたる益子での制作活動は私の財産です。益子は私の一部であり，私もまた益子の一部となりました。

1945　シカゴに生まれる
1969　益子・瀬戸浩氏に師事
　　日本各地の陶芸を研修旅行する
1971　グータ・エリクセン氏（デンマーク）に師事
　　ヨーロッパ各地を研修旅行する
1972　カナダ　ブリティッシュ　コロンビアで作陶・自営する
1974　カリフォルニア州ポイントレイズに築窯，作陶に専念する
1979　「第 1 回ウエストウッド全米陶芸展」入選
1984　日本に移住し，益子町大沢に築窯する
1995　「金沢工芸大賞コンペティション」招待出品
2006　栃木県指定文化財　鐵竹堂瀧澤記念館にて個展
2011　“Broken Earth” Japanese Ceramics from the Collapsed Village Mashiko Ceramics Museum Centre of Contemporary Ceramics Tegelen, Netherlands（オランダ，ドイツ）

鈴木 量　Ryo SUZUKI

濱田庄司の作品の中でも特に流描（流掛）のものに心を惹かれ，私の技法として流描を用い色々の作品を作ってきました。浜田庄司の流描が，書で言えば楷書だとすれば，私の流描は草書に近いと思います。

これからも，流描のおもしろさを表現したいと思っています。

1945　愛知県豊田市に生まれる
1967　益子・塚本窯に於いて作陶の道に入る
1971　益子町道祖土の地に築窯独立
1972　「第 19 回日本伝統工芸展」初入選
1979　日本工芸会正会員となる
1982　「第 22 回伝統工芸新作展」優秀賞受賞
1983　アメリカ・イギリス「日本現代陶芸展」出展
1995　「第 42 回日本伝統工芸展」
　　日本工芸会会長賞受賞　文化庁買上げ
1996　栃木県文化奨励賞受賞
2007　「第 35 回新作陶芸展」日本工芸会賞受賞

馬場 由知子　Yuchiko BABA

工芸品とはまさに用のもの。食器は料理を盛って美しい。盛らなくとも美しい。花器もしかり。

使い易く，かつ美しいことが良いと考えて作陶してきました。

昨今，食においても，長く続いてきた日本の文化がどんどん壊れて行っていることを憂いている一人です。

合理的なワンプレート料理が当たり前の現代ですが，我々の祖先は昔から陶器，漆，ガラス，籠，など様々の器を季節や場によって使い分けてきました。

ハレの日，ケの日。暖かいもの，冷たいもの。用いる器を区別し，そのうえ，料理の味が混じらないように個々に盛り付けをする気遣い。

このような日本人の細やかで素晴らしい感性を，どうか忘れないでほしいと切に願っております。

1988　高内秀剛氏に師事
1993　益子町に築窯
2000　韓国「国際薪窯フェスティバル」参加
2002　韓国「木浦ワールドセラミックコンペ」招待出品
2004　アメリカ「国際薪窯会議」参加
2007　韓国「ワールドセラミックビエンナーレ」出品買い上げ
2007　オーストラリア「クレイエッジ２００７」参加
2009　フランス　ジョンニコラ スタジオにてワークショップ
2010　アメリカ「East & West プリンストン展」出品
2010　セントアイブス　リーチ工房　他 視察
2011　オランダ「Broken Earth 展」出品

伊藤 丈浩　Takehiro ITO

1977　千葉県に生まれる
1995　焼物作りを志す
1998　益子へ移住　製陶所勤務
2002　半年間　アメリカ周遊
2004　約１年間，日本各地の窯業地を見聞
2006　独立

民藝運動と共に日本に広がっていった英国のスリップウェア。

平面に泥を走らせてから成形する，その特異な技法でしか得られない佇まい。

泥の潤いが交わることで現れる文様に魅了され，まだ見ぬ潤いの表現の種を探っている途中です。

益子焼について

あゆみ

現在の益子焼のルーツは，江戸時代末期嘉永６（1853）年，茂木の福手村に生まれた大塚啓三郎が益子に良質の陶土を発見，黒羽藩主大関候より土地を与えられ築窯したことに始まるといわれています。安政２（1855）年には，藩による窯元への資金貸し付けと販売管理の徹底が行われ，御用窯として窯元の経営が確立されました。元来焼物の伝統のない場所で始まり，農業との兼業で窯元は技術的にも苦労したため，相馬や笠間，遠く京都からも熟練工を教師として招き技術の指導・交流が行われたといいます。藩に納められた焼物は，真岡から鬼怒川，利根川，江戸川を経て日本橋の瀬戸物町に荷揚げ，江戸の町で売り捌かれました。創業当時の製品は甕（かめ），擂鉢（すりばち），片口（かたくち），土瓶，土鍋などの台所用品でした。

明治４（1871）年の廃藩置県により，益子焼は御用窯から民窯へと移行します。東京という一大消費地を抱え順調に発展，明治中期には土瓶生産の最盛期を迎えます。最も多くつくられたのが信楽や明石の土瓶の流れを汲むといわれる「山水土瓶」です。絵付け専門の職人が昼夜画き続け，多いときにはひとりで一日に千もの絵付けが行われたといいます。（以上参照：日本の陶磁７益子，島岡達三著，保育社，1976 年）

明治～昭和のはげしい時代の移り変わりの中，人々の暮らしや生活スタイルの変化，技術の発達により，益子焼も柔軟に種類や形，製法を変容させ，現在では日本有数の陶業地として世界にその名を知られています。

この間，特筆すべきは，大正 13（1924）年に益子に居を定めた濱田庄司（1894－1978）による＜民藝＞理論の

山水土瓶（益子陶芸美術館所蔵）

実践といえましょう。柳宗悦，河井寛次郎，富本憲吉，バーナード・リーチらと共に，人々の暮らしと営みから生まれた「無名の陶工たち」による品々に美を見出し（用の美），それらを民衆の工藝の意で＜民藝＞と名付け，以後，主に益子と沖縄を拠点に自らの作陶を以てそれを体現しました。

益子の地にて，健康な心と暮らしのなかから生まれるできるだけ自然で平易な焼物を志す濱田のもとには，国内外の多くの作家や陶芸を志す人々が集まり大きな影響を受けました。土地の原料を用いた生活文化としての伝統を受け継ぐ益子焼と，作家によるものづくりの姿を表現する作品としての益子焼という表裏一体の関係は濱田をきっかけにかたちづくられ，多様な表現を生み出す現在の益子焼へと積極的に受け継がれ発展しつづけています。

手濾し粘土

特徴

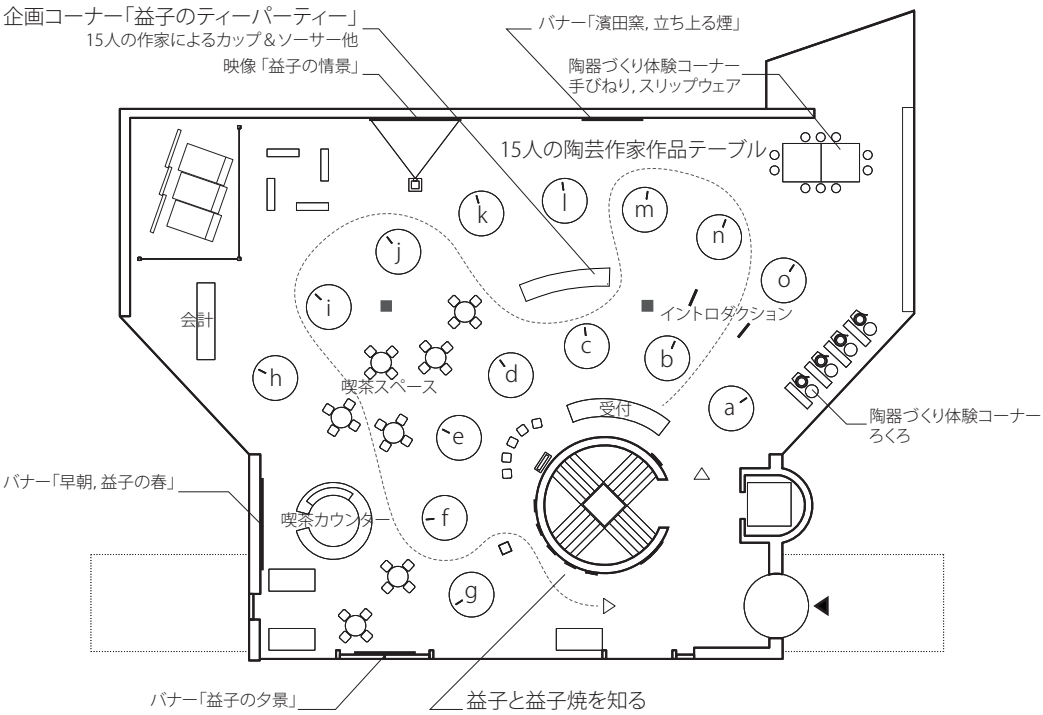
日用の器づくりに始まり，民藝の地として成熟した益子。そして，いま，その地で生み出されている益子焼には，伝統の中にありつつも新しい表現を求めるものや，これまでにない自由なスタイルに挑戦するものなど，豊かな多様性が感じられます。

益子の陶器店に入って目に飛び込んでくるのは，多彩な器たち。隣の店では，また趣の異なる器に出会えます。現在，数百名にのぼる陶芸作家が益子にて作陶に励む中，ひとことで益子焼を表現することは難しいですが，益子の豊かな自然と結びついた土と釉薬（うわぐすり），受け継がれる焼物づくりの技術があります。

益子で採れる粘土は，他の有名な陶業地に比べると埋蔵量も決して大きいとは言えません。約 160 年前，益子焼をはじめるきっかけとなった，大塚啓三郎が発見した大津沢地区の粘土は掘り尽くされ，現在は北郷谷・新福寺などで採取されています。また，日本各地の土と混ぜて利用していたりもします。

山から掘ってきた粘土をそのまま，形作って焼き上げることはできません。礫や砂などの不純物を取り除く水簸，粘土の中の空気を抜き，硬軟を均一にする土もみなどを経て初めて，ろくろやてびねりなどで使える粘土となります。

益子焼でつかわれてきた代表的な釉薬は 6 種類（並白（なみじろ）釉・糠白（ぬかじろ）釉・緑釉・柿釉・黒釉・飴釉）。その原料は粘土と同じく，ごく身近にある石や植物の灰です。素焼した器に釉薬をかけて 1200℃以上に焼くと，釉薬は溶けてガラス状になり，光沢を放ち鮮やかに発色します。また，窯の種類や炎の状態（酸素の割合が多い酸化焼成，割合が少ない還元焼成）によっても色や表情が異なります。特に，現在では数が少なくなったものの，薪を使って焼き上げる登り窯では，窯内部に舞った灰が釉薬となる＜自然釉＞や，炎が器に直接あたった＜窯変（ようへん）＞など窯の偶然が生み出す変化に富んだ器が生み出されます。



a 濱田晋作

b 濱田友緒

c 橋本秀一

d 島岡龍太

e 松崎健

f 島岡桂

g 村田浩

h 加守田太郎

i 佐久間藤也

j 萩原芳典

k 吉川水城

l ハービー・ヤング

m 鈴木量

n 馬場由知子

o 伊藤丈浩

特別展示 2012

東工大で益子焼

～知る・ふれる・つかう～

東京工業大学博物館・百年記念館 1 階展示室
2012 . 10 . 18 [木]　▶　28 [日]　会期中無休 / 入場無料
10：00　－ 17：00　(初日は 13：00 より，　23 日は 20：00 まで)

同時開催イベント

講演会
　平野良和（益子陶芸美術館名誉館長）　　「益子と益子焼を知る」
　志賀直邦（東京民藝協会会長，銀座たくみ社長）「個から大衆へ－河井，濱田，島岡の民藝陶への試み」
　10 月 19 日（金）　14：00 － 16：30　（13：30 開場）
　3 階フェライト記念会議室　定員 100 名（当日先着順）

シンポジウム「ものづくりの思考」
　基調講演　　：濱田友緒（(公財）濱田庄司記念益子参考館館長）
　　横堀　聡（益子陶芸美術館副館長）
　座談会　　：濱田友緒，松崎健，村田浩，ハービー・ヤング
　モデレータ　　：横堀　聡，遠藤康一（東工大博物館），阿児雄之（同）
　10 月 23 日（火）　17：30　－ 19：30　（17：00 開場）
　3 階フェライト記念会議室　定員 100 名（当日先着順）

益子の陶器づくり体験
　10 月 20 日（土）　講師：伊藤丈浩
　10 月 21 日（日）　講師：濱田友緒
　10 月 27 日（土）　講師：島岡　桂
　10 月 28 日（日）　講師：加守田太郎
　各日　14：00 － 15：30　1 階展示室会場内
　定員各 10 名程度（会期中会場内にて受付・先着順）

主催 / 東京工業大学博物館
共催 / 益子陶芸美術館，（公財）濱田庄司記念益子参考館
後援 / 朝日新聞社，大田区教育委員会，（社）蔵前工業会，下野新聞社，
　東京工業大学窯業同窓会，益子町，目黒区教育委員会（五十音順）
陶器販売 / 益子焼販売店協同組合
写真撮影 / 乾剛
展示協力 / 建築学専攻，計算工学専攻 亀井研究室

「東工大で益子焼　～知る・ふれる・つかう～」展実行委員会
道家達將 / 委員長，亀井宏行，遠藤康一，阿児雄之（東工大博物館）
法師人弘 , 平野良和，横堀聡（益子陶芸美術館）
濱田友緒（(公財) 濱田庄司記念益子参考館）
志賀直邦（東京民藝協会会長，銀座たくみ社長）
村田　浩（陶芸家，S42 東京工業大学無機材料工学科卒）

展示担当 / 菊地航，張昊，松浦光宏（建築学専攻）
スタッフ / 岡地智子，尾野田純衣，佐藤美由紀，渡利美智子（東工大博物館）
　岡林遼，前田明大（計算工学専攻亀井研究室）

発行 / 東京工業大学博物館　発行日 / 2012.10.18　ⓒ東京工業大学
編集・デザイン / 遠藤康一，阿児雄之，菊地航，張昊，松浦光宏
写真 / 乾剛（表紙 , p2, p12），横堀聡（p3 - p10, p11）　文 / 遠藤康一，阿児隆之

http://www.cent.titech.ac.jp

東京工業大学博物館・百年記念館